



^ 13
3108
1



へ13
3108
1-5

へ13
3108
1

見料子直奉行新

子孫古高借

以号子月

上藤

圖書印

昭和九年
七月二三日
請求

圖書印

復讎奇談稚枝鳩序

曲島

上藤

予家嘗藏古鈔本小説一帙蓋

吾家先大父信清軒元禄某年

所登錄也考其事蹟則

本朝天文弘治年間有孝子烈

女原是一對兄弟互在他御而

惟史記

第一

報仇復讐。銳志激烈。令讀者毛
骨竦然。惜哉。曆數悠遠。世人絕
無知之者。予近屬曝書之際。得
之。敗篋之中。不知此錄係何人
之筆。其文簡約。所謂古文辭者
也。以其童蒙之不易。遽解。因譯
用國字。更署之。乃命曰稚枝鳩
欲令其孝烈赫赫。干後世。豈可
不傳哉。豈可不傳哉。

文化新元甲子年秋八月

著作堂主人題



稚枝鳩
卷之二
〇年二

復讐奇談稚枝鳩總目錄

○卷之一

總標

青衣童

第一編

女兒息津勉断両頭蛇
棺縫九作厄得一口劍
腰越浦壯士歎薄命
天城山神女題禍福

第二編

○卷之二

總標

白錦毛

第三編

索逸鷹所太夫締良縁
脱獵阱字九郎承庇震
施恩九作遭横死
仗義綾太圖復讐

第四編

○卷之三

總標

黑暗知

第五編

大井川飢人投身
渡月橋過客逢父
膠刀後母謀晚兒
戌棺孝子伐雷公

第六編

○卷之四

總標

赤梢魚

鹽治廟

○卷之五

總標

黃金勒

許誓息律雪寛

第九編

山口城音羽屠身
小瀬河吳松獲馬
導義第一夫嬭頭神
大復仇二允授首

第十編

○通計十回

全篇五卷

復讐奇談推枝鳩總目錄畢
奇談 推枝鳩卷之一

東郡

曲亭馬琴著編

第一編

女児息津勉之兩頭の蛇を断
楠縫九作尼了一口乃劍と侍



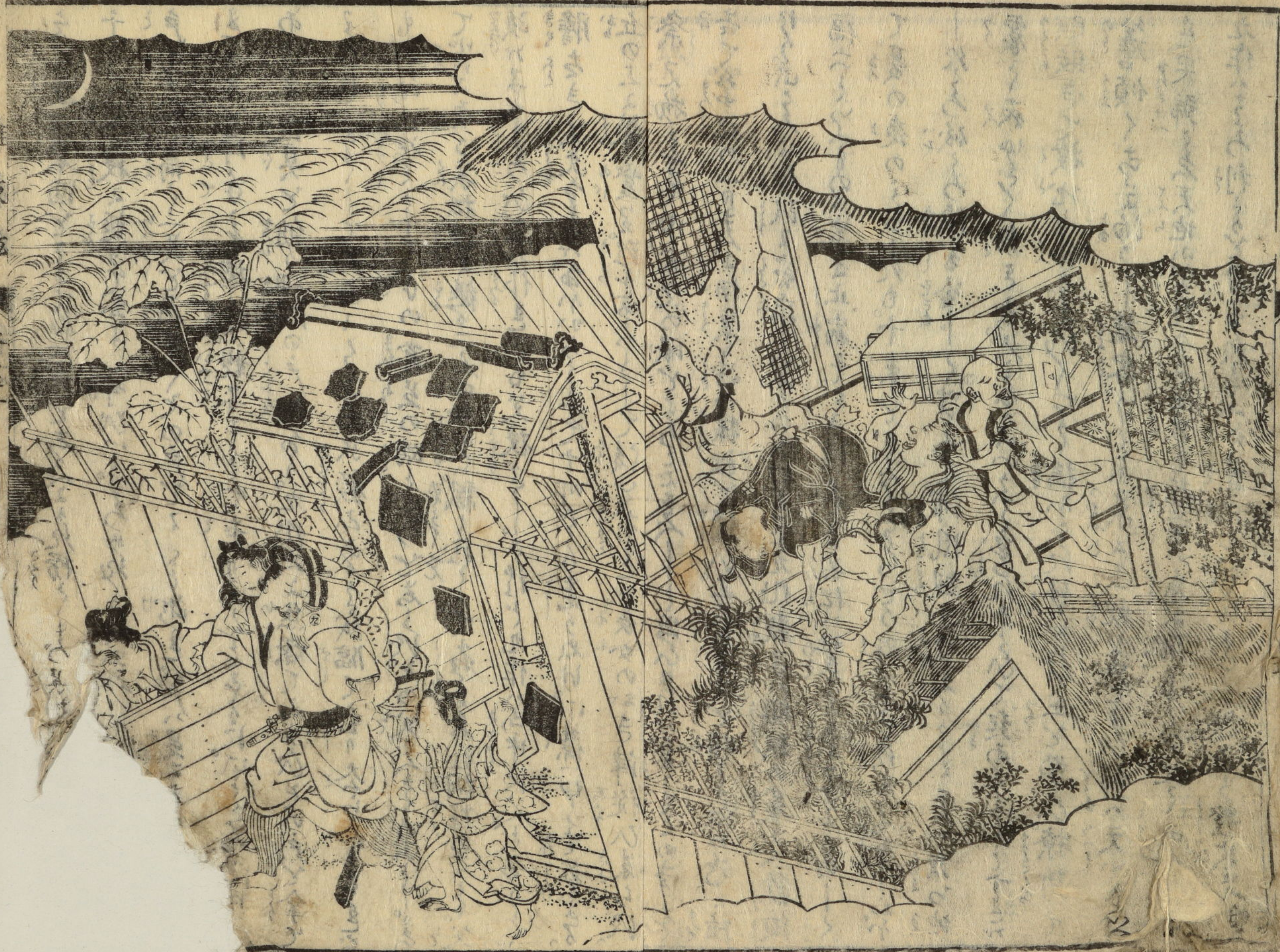
今ハむ。後素良の帝御代より一ツ天文のころまで。伊豆國天保六
の蘇湯が島村は楠縫九作と云ふ武士の浪人ありけり。その先祖と云ふは父の
楠縫造酒造久世と云ふ。世々因防國長岡の御土あり。小瀬國戸教十町の庄屋と
不持。家富より不持と云ふは。其の稟姓篤実ありて。生年又神仏とあはれん。志も
弓馬の達者にしてあり。この時足利の武藏やうやくと云ふ。列國の徳儀隆
ぶ。起りて。征伐親疎と云ふ。よくよく。酷吏私欲と云ふ。一。い。ま。は。こ
徳三年の春。久世の人の修練ありて。相傳の庄屋と云ふ。没収せられ。その

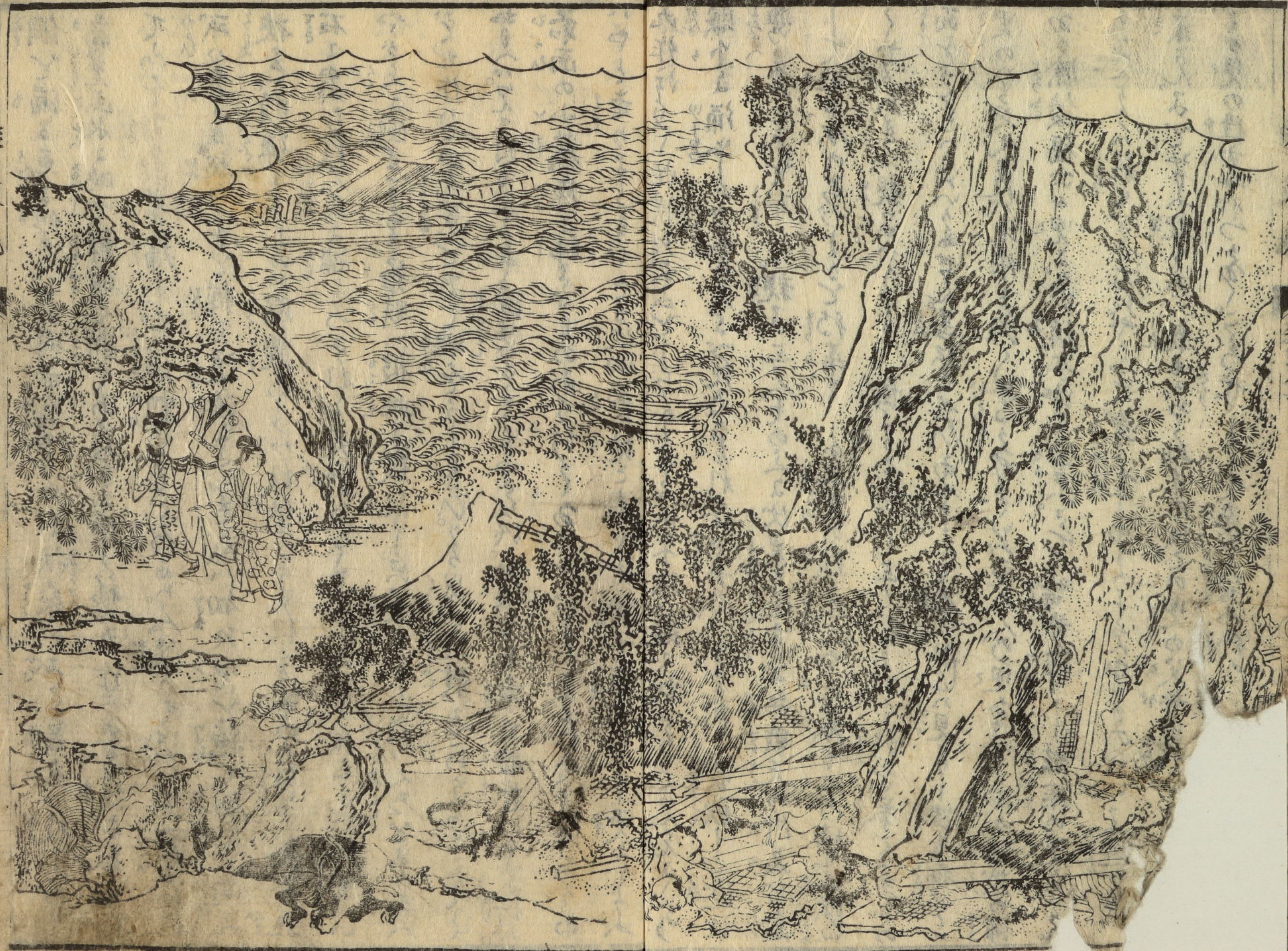
くして忽ちさきりひ人しりぬ。この久世が所居の地ありける小湫の川上
頭親世立の小堂あり。この堂中より夜とあるの末にいひ入るる其險頗る
出入これと運慶が化ありといひ傳へしこと。實にその由未詳なり。是に久
世の當國と云ふ一日。この本馬忽ちと夜に後が。人ふたふあやし。盗賊の
所ありて。あやしく。あやしく。そと索なきも終つてそのひりて。か
て久世の妻子と携りて國東に漂泊し。いくかどもなく相良小田原の城に本末
親小使より。あふ令の係るさうあやありけん。僅兩年と隔く明應二年
主君実れたの勢新九高長氏より。滅す。久世の時安房國に使用
この合戦もあつたけし。ましく浮世と親とてゆへは。友を頼るに迹
と天城の山前と避く。あつた老とや。あひら。大泉の末より。齡六十有餘
してあまらぬとの児九代。う父の武藝とけつた。就中討法に父もは
らうて。あつた。由基ま克用が風あり。父母没してのら。妻とむく子
三人あり。姉と息津とよびて今茲十一なり。妹とふると名はあて。姉小
ハ一かた。次の男児もて名を呉松とふ。まがせつるれど。賢い。いつこ
も天稟の標致。美麗中て鄙者似げある童男女なり。九代がく子
さうさう。多し。わねと。その才士あつて。農まわると。活き世も。感と
して衣耕とて食ふ。あつた。あるふ。ま。戦世にさる産業。く園
宅五人の口と銅人の。容易く。孫に。彼此の仕度とあり。劍法射藝。成さ
て活業と。あつた。あつた。村落中。小。あつた。あつた。あつた。あつた。
の夏の月。山川に。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
日ハ。雲根と。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
しるも。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。



ありと泣く声と惜び母の泣らくは為人の爲に返しの蛇と動く大
 陰徳とあり。人陰徳ありたは多し。天の恵あり。何のあはれ祥ありんか
 忌くそく諱も命も短くおとぬものも命も長くて業やうと
 病の思ひより起るものも意よりけりていふも歎きとし。さきぐ賺
 慰られて母の言げよとあひらん。おとぬものも命も長くて業やうと
 ひもあはれ何の陰もあはれとさゆれぬ。この阿婆と云やうやう四月上旬ま
 りぬ。毎年の卯月上の己卯日ハ江島弁財天岩窟の本宮より旅所ニ神幸
 あり。祭祀の儀式古より今よりあはれとあり。九代つりくおとぬものも命も長くて業やうと
 よりふらく弁財天と信し奉る。身より吉祥ありとつゆも又まを愁
 もか一特よるた等がとくより小童育れりも全く天女の利益よれん。今
 茲に子たと成く彼時小集流し。つゆの渠ホが後來の福と祈る。二のハ小神

祭又物をせて用吉恵の眼とよろこぶと一と思ひたれば妻もこの事を
 告て。祭祀の二日主人ハ伊東の傍の撰松と傭ひ。三人の子たと將く江の流し請
 り。びとろの社に客店といふのあけとて。九代親子ハ腰越の農夫餘綾
 福六といふの家に止宿を。まき津子も呉松ハ寝とく祭るるがとの一
 て。夏の夜のしらくれも。十年ととるらせり。既よその夜も人愛し
 一れとろ破らる浪も冷トく吹えて浦風颯と吹来り。かき人の忽ち地
 震く。夜ゆとく物もあはれ。人愛しといふと起あう。んとすまは
 瞑眩きて撲地と作る。まきつと揺るとん。壁からて土とあはれ。擦折
 言傾く。あはれ。一旅客。うと小集去。民祝ハ子をよび婦ハ丈夫い
 是哭號と名天地小集れ。今や世界も捺落の危小隔る。と又え。あはれ
 九作ハとろ利とろとのとるれも。不知業肉の福と祈る。つゆの燈火とる





網と漏る魚うとは似にう。この時赤鳥あかとりやうやく扶桑ふさうと云く若木の枝えだのかり
 鹿光山水ろくこうさんすい映あやて鮮明せんめいの斯ごとくてあぐまのりく秘ひが九作くさくのるも後あを多おほと將
 て山やまを少すくあふ痛いた。大地おほち割さるるところあり人隔おとりて法ほがう葬まうられ
 或あるハ老おいる親おやのちと掖ひきて道落どうらくよふも。或あるハ初はつ見みと抱かかて樹木じゆもくの間まに
 挟はさも頭あたま碎くだるものハ脳髓なんずいあうりれ。壓おさまうられものハ目子めことび。出瓦でい
 石いしよ中ながられ人馬じんばは踏ふまうられ死骸しかいいくどくしひふて死しまふ。は林梁りんりやうハ
 やがら倒たふまうる皇家こうか賊ぞくハ彼此かたまたまは殺乱ころ。只壘ただくして行人こうじんをさうりわん
 ど。九作くさくハこの光景あかりと見て魂あまをううあひ。う見みの死骸しかいもこのうらまこそと
 神かみハ。見る目めも多おほくそ。淚なみだ禁こむことわらび。あほろと索もとて腰越こしのうふ行ゆきハ
 前面まへの小篠原せうじゆらは砂すなるりのあつらうあるまにうく又またもかき津つあり。わ
 ハやと走りはしりうらまうるに四面うへの地ちこくく割さりて溝ぞうとわ。更さらもかう
 へまらあふさ。せんまへるまは傍わらの尸骸しかいと投なりて埋うま。やそのま
 うらうりていふあやかきば父ちちもま。つとくふもあまや入いらん。政せいを業わざ父
 が款くわんとて。つやくおゆえいらど。噫あは泣なかして起たわらん。又またハこれをえ
 て大おほふらうび。あまらう。いま死しむあうらう。いづつ。わらうとてえら
 路みちようらんときらふ。かき津つが足あし地ちとるれど。強あまくこれを引ひが。かき津つ頻ひん
 り小こ足あしいむむくと叫ながらうらうらう。又またハうらうてその足あしと見るも怪あやし
 うの一ひと隻しゆの蛇へびあかき津つう足あしは楯たて竹たけ削く半はんハ竹たけの根ねと纏まとへう。こくに於おく九
 作くさく忽たちち威い怖おそし。とまハちこの蛇へびを拜かかくいつく。これ驚おどかすもあはね
 弁べん賊ぞく天てんの使者しやあり。嚮むかふかき津つをわけてうらう死し骸しかいは地ちの割さりて
 足あしこまうらうとてびとらう倒たふま。十じゆ死しのうらふ一ひと生せいと清せいること。偏ひとは弁

惟枝愚

...

...



財天の衛護りて日者人のぬゝ両頭の地を斬一陽報をへし。女四がく
まて神の祐あとの具松がるも移へばなやむべし。むねのいさそて物さひは
の傍のさか伏がむとれ。蛇の母のづらかま津が足とまられ小篠のうらまひ
くすえろが篠二三竿振りとうろ切きて朽くと倒る。九作まひく異つて篠
とくまけて蛇のけ方と索る。蛇はええひして黄金のりの太刀一口あり。とま
いらりあげると長一丈四五寸よこばやとれと抜るませば寒光凜々
して晴雲のぼり。文章にこして青蛇の色あり白虹天を衝き紫電
地を穿りぬれ氷錐氷水凝り為結ぶ。実ま希世の宝剣るまこば駿然と
まが思と着ていつくし。晋の雷煥が太阿の剣をうらう延平津に跳入り化せ
たりてゆきひ人同久らひ許旌陽が第三劍ハ淵とよ小蛇と化して武
勝之ま倚しとまど今この劍ハ竹叢と出づ蛇とるねら。彼蛇化してこの劍
とまるとを疑ひまひひ。まひく神慮の灼然なり威佩し。遂まこの短刀を勝
ま考まがま津まを懐を節とほひ。かハ汀渚の方たうゆ

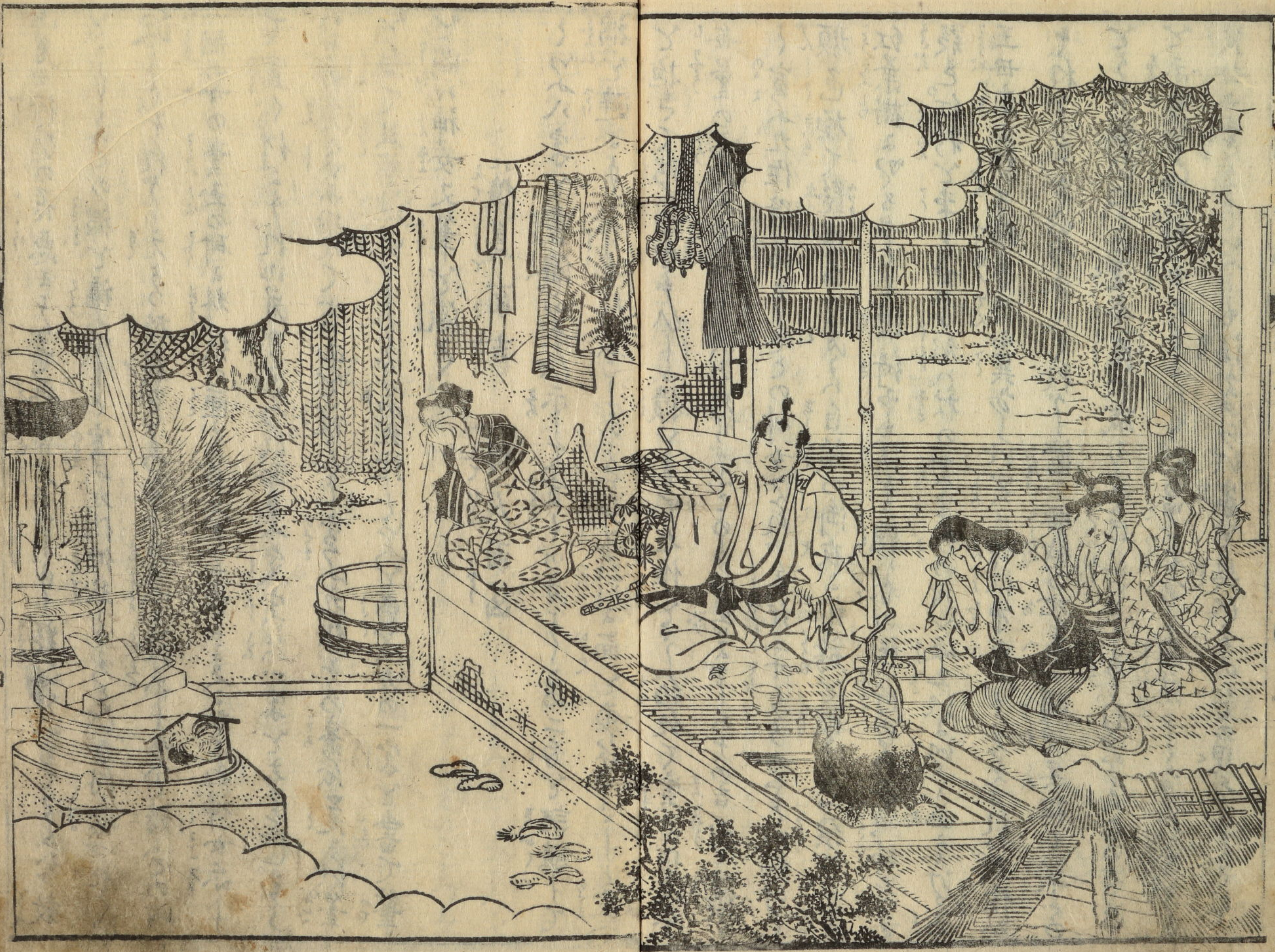
とまるとを疑ひまひひ。まひく神慮の灼然なり威佩し。遂まこの短刀を勝
ま考まがま津まを懐を節とほひ。かハ汀渚の方たうゆ

第二編

腰越浦ま壯士傳命と歎く
天城山ま神女過福と題し

かくて九作ハ三人の兒どもとほひ。あまび腰越の浦ま来てつるまは。昔の
地表ま海濱うらうらうとええて。辺のぬれこもぐくか。流されぬ。助これ
る平沙とありて。福士一家のものもいつ他行らんるまあるまのあり。まのまから
泊松碑くふま倚。茅舎壊て海ま漂ふ。砂のには七里。瀆磯うら浪まおあ
げられ。水死の老少牛馬の尸骸ハ。うらうま。沙鷗濱鷗の腹とこやして
壘まら。されが地。の民俗も僅ま死と免まう。の。十が二三まら。とええ
まよまび親とまらぬ。声只浦風ま吹か。うて。哀傷まら。了まら。びが

津ハ却々恙ヲ死シクニテ是天ヲ命アリ思ふよこの後大勢ハ年賦六
 よりコト夫物不授ある見事多れば今よりこの子とヤシキヒて吳松も
 見のよ鐘ハ寺にありて声外にゆもとらなり命はあつたふら
 兎のゆくもあつた時あつて天女の美顔のよあれはつて数さ
 めいそとさめく疎あをむつていども妻はなほさうりてあつて衣引
 うらあつたは是年この事被り小月日とあつてつてつてつてつて
 かく冬のとらちとつらぬ一日九作が家のうしろあつて琵琶の音
 蕭々と吹也九作うらあつてその曲と禁てる二三町をいゆけは忽ち
 異香馥郁と薫どて桃華の洞に到り如く只見まは疎林のうらふ一個の宮
 室あり瑠璃の甍水晶の柱ハ玲瓏とて月映さ朱簾錦障ハ劃然と
 して陞る縁る裡面あり居長の女の童侍立て中央一個の神女一面の琵琶
 と抱きて傍坐ありいしが横とりて九作とさう抱けて宣くは今
 毎量の憂苦あり一しかあつたふこのゆと告よりふその吉凶と説く
 と宣ふ九作發赤とてこの神女なれば年紀三十うらあつてかゆく
 顔色極て艶麗ありあつて白綾の御衣と緋袴と被らるが一朵の白雲
 紅葉樹よりさうく羅綺も怪む親ハ春の風一庁の花を以紗とて
 彩色紅粉と束とせざる秋の雲半江の月と吐出は似く画さける西
 王母本は刻る妙音天小異ありは實は神仏中の人とんえられ九作は
 それうとていふそれ郷は腰越の地衣は顔見異松といふもの
 とういひぬこの見今七歳少て己己の日あつたわがうらこの言は
 と示あつた神女のさまはくこの見意あり赤慈とすられ今かく
 父母小きうらうらども後まらば家と真にまのこの見うらうらと



而身が行いの善悪よりて再會をせし。り類とやめてはるはが教
 とまのいこの禍と禱へ一と宣ふ。九化使然とよるまび。るは額づれく
 いてく。それぐえらる概穀のころあ。只速に説示し人として信ふ。この時
 一個の女の童玉の研は料紙の匣よりとへく九作がまよおさぬ神女示し
 て宜く。何ままれゆ身がころに押ひ文字只一字とあるまじ。ま
 はその文字ふつれて右函と説んと宣ふ九作その意をえんは筆
 と執て且く沈吟し。るが名九作しつと象る。九の一字と書て筆
 と圖は神女又筆と誅く
 以獲鳥而吉 得人而凶
 といふ八字と書添ふまび示して宜く。ゆ身よりこの二句と記臆して
 禍と避より野もたがまよあふ父子終る面とあをせがしと宣へ

九作ゆり感激一。亦おき津ふ鳥綾太郎ホガ生涯の禍福
 と同ふ。神女意あらも悠々として坐とらあふと。る海をよりて同
 禱へしや。此雲たらゆら眼よまきり。函絶してまろぶとみり人む。
 豁然とおとろきえぬ。これ楠柯の二友あり。九化つらくまのころを
 考ふまび神女はをらら弁財天めて未前の禍福と示す。ゆのあり
 し思量一。夜明くのら妻もも愛想の事成使まバ妻も示視のま
 トけるま感涙とともるね。吳松が命恙たれといふとこのまふ。少ふ心
 ころけくありぬ。九作は又の鳥と獲て吉あり。人をゆく凶ありといふ二
 句のまと物ごうていやく。これころむく九の一字とま。し小神女ま
 ぐのまと出流あり。まこれま隠語ゆて容易解ま。このま何
 ともあひあふ。時よまき津母のまわらよありてつらぐ父が物まらと

昔や枕吟していそぐ。九鳥と流れば壻とあり。壻のありまも誘ふ
 亦猶よ二夜の礼ありとつら。さう兄弟のうらふ吉事ありの祥と人
 亦九よ人と加まむ仇の字あり。是その兇の仇とあり人と深のこあり
 む。この禍を避くといふ謎ありとやとらふ父母この言を聞いて大に驚嘆す
 父ハかき津が此身を接す。飲然としてつらつら。さう兇三人のうら。さう九
 も長その性伶俐とらふも。今さう十一歳しておきあふ日も久しかり
 どむいー蔡琰と六歳のとら席と流し琴の弦の断りと辯と成る百襲
 堆命跡磨紀異利の歌とら吾田娘が謀反らんとさう成るあひい
 天才古今よ独歩して人間のさうひびび。さう女児それれ異なり。是ひと
 へ大智惠聚大辨財天十一歳の童女と詔してこの句のさうを解志と
 めありと。貝響の見たれと。夫婦只顧このさうと賞賞と浩流小前門

よ案内の声して。年紀四十有餘の武士。僕従四五人と卒て入る来
 り。九作よ見えんらと清く。九作とら出むとらその故と回ハ彼
 人のいらく。それがら雲州富田の城主尼子義久が家臣よ。楯縫所太
 夫といふのあり。今千里とまきしてせびてまわらふ以いぬる九月
 上旬。主君義久と同の関山よ放逐志あり。小宅とらとこのさうの奪り
 て行くを志す。此れこの奪りての背をより白く。その取らむを奪のこさ
 られがこれと時雨鶴と名づけてさう君の種をよのつらう。さうま
 の日ゆるらうとせされば。義久とらとこれを惜む。或ハ陰陽師より
 らせ。或ハ法社よ奉幣。むろく國中と索らうとら。一日生を
 日漸。法社のさう。夜ち物と極い。さうそれよ市村。蔡命とら
 つらせあり。今國主義久が死へる奪り。伊豆国天城山あり。さうやく彼和



人として素より押入しつゝい神他ありて彼臺 呼ぬ義久この跡を
 望みしむらびて宮に當國日漸上之宮の檣柱田心堀瀧藏津姫市杵
 島姫の三つらひ蘇州巖山鳥の神より古人の冥驗灼然たるは神勅
 更に疑ふべし彼國はもとむし雨雉と素來より命せしむ。
 それがしむこの使ええきれ肥馬を鞭うちこの地は弛りしむ。
 今戦國の時を武の形實は抑留せられあひは大河は橋梁成りてさ
 づよ目と費し。きのこよ初てしつゝ彼を素とすも絶く去
 るものありある足下は多と捕ふ練して鳥取の号とて得るるよ
 しと修人ばをみらら力一ありさんち来るぬ形はやく彼を
 捕てゆきせあふ言合ふやふれとあつして速らされ九化この
 事公めてあふび感悟し命財天愛おの陀室よとゆき言ふ
 し示しあひし星ありしは市杵嶋姫と命財天の雨神
 ありしは又天女のまれば幸福と導かれなりしは中より
 ありしは取極と業と一は平よ山林よりてたれ
 ありしは天城の山中より一は鳥のまらるるをとりしは
 と久し足索あり時雨雉ありしは明日は必此の鳥を
 べしといしやもるる素引されしは所を夫は夫よりしむ。とみ
 と約してこの日旅宿ゆぐりる。

上藤

復讐奇談雜枝燈卷之一身



